

2016年3月10日(木曜日)の下野新聞に 被災地応援について紹介されました

2016年(平成28年)3月10日(木曜日)

下野新聞



甘い匂いに誘われ、アキモトのテントを訪れる富岡町からの避難者＝2月6日午前、福島県いわき市泉玉露

甘い匂いに誘われ、テント前にできた人だかり。目の前にはキツネ色に揚がったドーナツが並ぶ。一口頬張った高齢の女性は「おいしいね」と声を上げた。

2月6日朝、福島県いわき市泉玉露の仮設住宅。那須塩原市の製パン業「パン・アキモト」で入社4年目の中島七穂さん(22)が慣れた手つきでドーナツを揚げていた。

この仮設住宅にはいわき市から約40キロ北に離れた富岡町の住民約1000世帯が避難生活を続けている。一時は500人を超えていたが、若い世代は職住接近を求め仮設住宅から出て行き、残るのは故郷への帰還を待つ高齢者ばかり。中島さんは寂しい思いをさせたくないから、笑顔を取り戻してほしい」とほほえんだ。

被災地にパンと笑顔をお届けしよう。

パン・アキモト 那須塩原市→福島県



「アキモトが自社製品のパンの缶詰やドーナツの無料配布を始めたのはそんな思いからだった。

東日本大震災直後から、秋元義彦社長(62)をはじめ社員たちが東北地方の被災地を月に1度のペースで訪問を開始。若手社員には休日でも自主的な参加を呼び掛け、人間として、さらには企業を支える一人として成長に期待を寄せた。

だが、本業のパン製造と被災地支援活動の両立が、必ずしも順調に進むことばかりだったわけではない。

同社営業部の秋元信彦部長(36)は「勤務の都合で社員が参加できず、

応援 社員成長支え、支えられ



社長と常務の2人だけの時もあった」と、この5年間を振り返る。

活動を継続することに満足感もある一方、食料支援が避難者の自立を妨げているかもしれないと、悩んだこともあった。

「でも私たちはある日からこの活動を『支援』とほつとする」

「浜通りの言葉を聞く」とせず、「応援」と呼ぶことにした。そうしたら気持ちが楽になった。

アキモトは昨年だけでも福島、いわき、本宮、二本松の4市を訪れ、今回で通算50回を超えた。

「浜通りの言葉を聞く」とせず、「応援」と呼ぶことにした。そうしたら気持ちが楽になった。

アキモトは昨年だけでも福島、いわき、本宮、二本松の4市を訪れ、今回で通算50回を超えた。

2月6日の活動に参加した中島さん。実は、いわき市と同じ太平洋に面する福島県浪江町の出身。自らも避難者だった。2012年春に地元の高校を卒業後、アキモトに入社し現在、那須塩原市で1人で暮らす。

翌13年、同社の一員として、いわき市でのボランティア活動に参加した。同市泉玉露と好間工業団地の2カ所の仮設住宅を訪れた今回の活動も自らが企画した。

「祖父母の存在があるのかな。」

中島さんは仮設で暮らしお年寄りの姿に、今は福島市と福島県郡山市で生活する祖父母を重ね合

わせていた。浪江町が大混乱に陥った原発事故後、互いに避難生活を強いられた。あれからもう5年近く、会えていなかった。

「ありがとね」「また来てよ」

活動では毎回、避難者のお年寄りから掛けられる言葉が胸に響く。自分もまされていのだと気づかされることもある。

中島さんは「私たちが避難者を支えてあげてい

るのではなく、むしろ支えられることのほうが大きい」と振り返る。

秋元部長は活動の成果をこう実感している。

「被災地を訪れた社員は人間的にたくましく成長した。それは会社としてもまさに成長」

3月10日には二本松市内の浪江町仮設住宅を訪問するアキモト。一般の参加も呼び掛けており、同社6年目の「被災地応援」はここから始まる。(青柳修)



アキモトが訪問した大熊町の仮設住宅。避難者の間で会話も弾む＝2月6日午後、福島県いわき市好間工業団地

ボランティアは今…